
俺の街のデパートで

とっくり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の街のデパートで

【Zコード】

Z7604Y

【作者名】

とつくり

【あらすじ】

いつもどおりの『日常』が続くと思っていたそんな矢先。新装オーブンのデパートで子どもから老人まで中にいた人たち全員閉じ込められた！？

生き残るのは七人まで…？そして最悪のゲームが始まる。黒幕は？目的は？主人公たちは、生き残ることができるのか…

プロローグ 「新装オープン」

春が来たと思つほど、最近は、暖かくなつてきており、街の様子も変わってきた。

入学シーズン到来、といったようで家族ぐるみで休日に買い物をする人が増えている。

三月一十六日 土曜日 街の中心的デパートの新装オープンの日。

今日もいつものように、荷物を持たされる父親や駄々をこねる子供も、それでも楽しそうに会話をしながら買い物をする人。新装と聞いて買い物に来る人。

いつもどつりの、人でごった返した息苦しい日が始まるはずだった。

高層ビルが立ち並ぶ街。そのビル群の中でひときわ高いビルの一室。きれいに整頓され、塵一つない部屋。パソコンをたちあげ、ひときわ大きいテレビの電源をつける男。部屋を照らすテレビの画面には、朝の顔と言つべき大柄の男性アナウンサーがデパートの様子についてこと細かく丁寧に説明していた。その画面の後ろには、無数の報道陣の姿も見える。

『「じりんのように開店前から長蛇の列ができるています。』

カメラの映像がデパート前の入り口を映した。走り回っている子供たちから、高齢の人までさまざまな年齢の人々が並んでいる。

『さつそくインタビューステーション』

『今日は、何を楽しみに?』

『デパートの中にある、クラウン・クラウンっていうお店ですね。雑貨屋なんんですけど、近くにお店がなくて……そしたらこのデパートの中にできるって聞いたので。』

笑顔で答える女性。

『そうですか、あとで私も行ってみようと思います。また、お伝えしたいと思います、それではいつたんスタジオにお返します。』

その様子を、見ていた男は、自分以外いないその部屋の中で独り言を零す。

『やつといじまで成長したな。』

(人を踏み台にしてきてようやくじめできた)

『とりあえず安心だ……』

この駅もまた、いつもどちらの忙しい日が始まると思っていた。

プロローグ 「新装オープン」（後書き）

はじめまして、とっくつです。この作品を読んでくださった方々ありがとうございます。

初作品なので、たくさん矛盾があると思いますし、いつまで続くかわかりませんが

温かい田で読んで下さるというれしこです。

次話は、できる限りはやく投稿しようと思こます。

第一話 「わあ、行い！」

同日。 王譲高校学生寮。

『……それではいつたんスタジオにお返しします。』

「ねえ、せっかくの休日だよ？」

広いとは、言えない一人用の部屋に声が残る。

「……」

「ねえ、無視ですか？この一人部屋で無視ですか？」
あからさまに、文句を言う一人の少年。

声は、男子にしては、高く体も小柄。しかし筋肉は、細いながらに
かたくしっかりしている。

顔は、童顔で背の低さも重なり中学生に間違えられることがあるら
しい。

だがしかし、陸上部でそこそこ早い奴だ。……あんまり知らないが。
とりあえず青年でなく少年といつ扱いだ。

「……」

「…………紅美ちゃん。」

少年の一言に過剰なほど反応し固まる俺。

「なぜ知っているんだ？」

ま、また落ち着け俺、如月紅美さんは、ただの友達じゃないか！！！
たしかに、ちょっと細いし、雪のように白い肌もいい。それと対照
的に黒くつやのある長い髪。さらに、目がぱっちりしてて背もちつ

ちやこ（俺に比べて）だが笑顔がお姫様のよう可愛らしく……
ちょっとだけ、手に触れてみたいとか思うし、もし彼女だったらな
あとか……

しかし、そんなことは、万が一にもないぞ俺！動搖するな俺！

如月さんが彼女だったからあ……

「淳くん……そういうことは、心にしまっておこうね？」

「悠……おまえHスパーだったのか！？」

「いやいや、常識的にありえないからね？」かんじききまつ「全部ぶつぶつ言つてたし、急に叫んだかと思つたら遠い目しだすし……まさかとは、思つてたけどそんなに紅美ちゃんのこと好きなんだ？」

穴があつたら入りたいとは、いつこうとか……
こうなつたら、認めるしかないな……

「ああ、俺は、如月さんのことが好きだ！――」

言つてしまつた。だがしかしこれで悠もわかつてくれるだろ？……

「ふえ！？」

「え？ まじでー・せうだつたんだあ～」

不意に部屋の入り口から声がかかる。まさか…？

この可愛らしい声と女子にしては、乱暴な口調……

間違いない、この声は、如月さんだ。

だが、しかしなぜここに如月さんが？

「淳くん、また口に出てたよ？いくら紅美ちゃんが好きでも、紫苑ちゃんを乱暴扱いは、よくないと思つよ？……あながち間違つてなけれど。」

「ヒビツ、私これでも一応か弱い女の子よー？」

この乱暴なやつは、藤倉紫苑。ふじくらしおん 女子の中では、割と背が高く、運動神経も良いほうで

悠と同じで陸上部に所属している。

「まあ、それで？紅美のこと好きなんだ？」

「そりゃ、それだ！なぜ、如月さんがここに居るんだ？」
素朴な疑問である。

「あつ、僕が呼んだ。」

「あつあのーー今日は、なんで私たちを？」

……顔が真っ赤になつてゐ、可愛いにな
なんか、なでたくなつてくる。

「淳、セクハラ～」

「淳くん、また口に出てますよ？」

もひ、無視だこれは、無視するしかない！

「まあ話を戻そうか、一人を呼んだのは、今日オープンする王譲^{王讓}テ

パートにみんなで遊びに行こうっていつの間にか集めたんだよ。」

それであんなに、話しかけてきたのか。

「いいじゃんそれ! 行こうよみんなで!」

「紫苑ちゃんが行くなら、私もいきますー!」

「じゃあ、決定といつことだ。」

「俺の意思はビックリ?」

「紅美ちゃんが一緒なのに?」

……そ、うか、そ、うだな! 僕のテンションは、限度といつもの知
らぬいらしい。

如月さんが来るなら、選択肢は、一つ一

「さあ、お前らー今は八時だから、九時に出発だ!」

「うして、俺たちは、王議院パーティーへ行くことになった。

ちなみに、如月さんが変な悲鳴を上げたのと
悠と紫苑が、ガツツポーズをしていたのは、秘密である。

……まさか、こんな幸運に俺が恵まれていたなんて！

悠と紫苑は、おいといて私服姿の如月さんが見れる！

……俺の服は、大丈夫だろ？ 荷物は？ オツと危ない携帯を忘れるところだった。

財布、携帯、ハンカチ、ティッシュ……

「淳くん……口に出しながら確認することは、いいことですがどこ の小学生ですかあなたは？」

「大丈夫だ、問題ない今の俺は、いつもと違うんだ！」

そつ……なんか、こう、口角が上がったまま下がらない感じだ。自分で言つのもなんだが、俺は、体つきは、良いほうで身長も176センチと高い。

それで、普段は、『無口なオレ』のはずが今は、『ニヤニヤしている少しあブナイ、オレ』になり下がってしまっている。

「ニヤニヤしているアブナイ人、準備は、もう終わったのですか？」

悠が、今にも吹き出しそうな声で聞いてくる。

……もう笑うなら笑つてくれよ。

「ふ、ふふ、あはは、もう駄目我慢の限界！」

大きい声をあげて笑いだす悠。

「淳くん、ほんとに考えてること口に出しますよ。」

口に出しておる自覚があつません。

「とりあえず、今日は、紅美ちゃんも一緒になんですかから気をつけて
ください」

「今、気づいた。なんで敬語になつていいんだ悠。」

「アブナイ人には、気を許してはいけないので……」

「わかつた！わかつたから、敬語はヤメテ」

「じゃあ紅美ちゃんの前では、頑張ってね！」

不気味に悠が、笑ったのは、気のせいだとおもいます。ハイ。

……驚いた。

何に驚いたかつて？

じゃあ考えてみて、友達の学寮に呼ばれる、部屋に入る。

『ああ、俺は、如月さんのことが好きだ！』

普通に考えてびっくりするよね。

それなのに……その人を含めて買い物に行くなんて。

「紅美、どうしたの。」

「ううん、ちょっと唐沢くんのこと……」

「あ～淳？ 気にしなくていいってあんな奴、といつか男一人の告白ぐらいでうらたえないでよ。」

「紫苑ちやん…… ぐりこつて。」

「とにかくー今日は、買い物を楽しもうよー淳が変な」とをしたら張り倒すから！』

「あはは…… ありがと。」

……よし今日は、思ひっきり楽しんでやるー！

唐沢くんには、びっくりしたけれど……ね。

「わうそう、淳になんかおじりせられぼっこのは。すぐ買ってくれるわ、あいつなら。」

「紫苑ちやん…… 冗談に聞こえないんだけど。」

「え？ 冗談なんか言つてないんだけど……」

九時十分前には、唐沢くんも神崎くんもすでに私たちを待っていました。

……なんか、かつこいんですけど、唐沢くんの私服。

第一話 「ああ、行け!」（後書き）

紫苑 「なんか、私の説明雑じゃない？」

悠 「僕たちは、作者に逆らえませんから。」

とつくり 「雑で、すみません！――」

紫苑 「私の役ふやしなき」よ。」

とつくり 「考えておきます……」

……というわけで、一話目です。次は、いつになるか分かりません。できる限りがんばります！

第一話 「俺の家族」

田口 王譲町の民家

『クラウン・クラウン』っていうお店ですかね……

傍にあつたリモコンを取り、テレビの電源を落とす。
久しぶりの休日。久しぶりに家族で買い物に出かけようかと思つ。
娘も妻も食い入るよつにテレビを見ていたことを思い出す。

「お父さんーなんでテレビの電源落とすのー?私見てたんだから!
お母さんもなんか言つてよ
一緒に見てたでしょー。」

「そうねえ……急に電源を落とされるとほ、思わなかつたわ。」

「…………それなんだが、久しぶりの休日でな、いまからやつさの『テパート』に行くことで許してくれないか?」

「お、お父さん!急にやせじくなつてびじつしたの、病氣?」
…………やすがに、病氣扱いされるとは、思わなかつた。
今まで仕事一筋だったから、仕方ないとほは思つが。

「…………グローブ買つてくれるなら行く。」

息子にねだられること、娘にねだられることが、予想はしていたが出費は大変なことになりそつだと思つ。

「じゃあ、美幸、直弥準備しておいで。」

「…………うん」

「すぐ、きがえてくるわ。」

「悪いわね、せっかくの休日だったのに……」

「たまには、父親らしいことをしなきゃな……」

妻が過労で自宅で倒れて病院に入院したのは、一年前。
息子が俺に自分のことを話さなくなつたのは、一年前。
娘が俺をあらかさまに避けはじめていたのは、三年前。
俺が家族に関心が無く仕事づけになつたのは、半年前。

朝早く一人で会社に向かい、会社では能力の無い上司に叱られ、家
に帰ると休む場も無い……

それが変わることなく続いていた。

なんで、俺がこんなに苦労しなければならない……

何故お前たちは、そんなに無駄に金を使おうとするんだ！

それは、俺の金だ、俺が頭を下げてまわつたり一日中パソコンの画
面と戦つていたり、

俺が働き俺が苦労して手に入れた金だぞ！

それでも……それでも自分が全部悪いのは、俺が一番わかってる。

妻に家のことをまかせっきりにしていたのも自分。
息子は、強い子だから大丈夫だと思ったのも自分。
娘は、変わらず昔のままだろうと思つたのも自分。
それを認めず逃げ続け事実から逃避したのも自分。

俺も家族も、変わってしまった。

もつ昔の想ひよひよは……自分の理想の結婚生活は……などと……

だが、今の俺は違う。

昔の自分の過ちで失ったものは、今の自分が取り戻す。そう決めた。

家族をもう失わないために、自分を忘れないように……

「お父さん行くよー何べずぐずしてんのよ。」

「……早く」

「美幸、直弥、そんなこと言わないと。」

「悪い悪い、考え方をしてた。それじゃあ行こうか。先に車に乗つとこで。」

俺は、いよいよ父さんに変わるんだ……

デパートに着くまでがとても長かった。

マスコミの宣伝、あの王讃グループの新装デパート、誰もが行くと考えられる。

それでも甘く見すぎた。

渋滞のせいで先に進めないのだ。……」れでは、車を止められるかをも怪しい。

ちょっと歩くが仕方ない。

普段の自分なら絶対渋り止めないが、特別な日なので有料の駐車場に止めることにした。

「ちょっとお父さん！まだ着かないの！？」

「まだだ、少しごらい歩け。」

文句を言われてしました。今日は、もう文句を言われないよつて気をつけ……

「だから、もう少し近いところに止めろって言つたのよ！」

……今日は、十回以上言われないようじょひしてよつ。あと八回か。

あれから、少しばかり時間がたち現在九時四十五分。
王議^{シテ}パートは、十時開店のようで長蛇の列ができていた。
さまざまな年代の人^{ヒト}がいるようで、前には学生四人組。後ろには、
男一人が並んでいた。

「 なあ……」

妻に声をかける。

「なんですか？」

「今日ゼリの店に行つてみたい?」

「ゼリでも、いいですよ。」

やせしく、落ち着きのある声でゆっくりと話してくれる妻。すると突然前の学生四人組に話しかけられた。

「家族で出かけてるんですか?」

髪の長い白い肌の子が話しかけてきた。

「ええ。」

それに、妻がやせしく答える。

目の前の女の子は、歳とった中年が「う」とでは無いが美少女というカテゴリーに入ると思つ。

俺の妻は、歳は、とつてこるものの中には無い上品を持つている。

「うりやましいですね。……あなたの田那さんのような人と結婚したいです私。」

うれしいこと言つてくれるじゃないですか。

「ええ! 紅美あんた年上好きなの! ?」

「淳くんどうするの?」

「俺は、そんな如月さんでも大丈夫だ。」

同級生であろう子たちが騒ぎだす。

そんなに駄目かな俺……

さらに娘が追い打ちをかけてくる。

「ええーお父さんなんかやめたほうがいいってー後悔するよー。」

「美幸、私はどうすればいいの？」
妻が、先ほどとは違う声色で話す。

「……ええっと、ドンマイー！」

「母親に、向かってドンマイは、無いだろ。」「

むむ、向としてもここ父親でいなれば一

「お父さんと言つているんじゃなこのーお母さんと言つてのー。」

怒りせてしまつた。……あと七回。

「私は、後悔してないわ。」

妻が私のことをこんなに思つてくれていたなんて！嬉しい！嬉しい
よー

「……アホみたい。」

「ん？なんか言つた直弥？」

「……べつ。」

息子は、なかなか昔のやつじみ、ならなにな……

『口今よつ、王譲アパート。開店ですー』

「 「 「 いらっしゃいませ」 」

アナウンスと共に大きな声で挨拶する店員さん。
後ろから見ただけでも中の広さと清潔さが分かる。
ほんとに大きい……人も多いしほれないと云いけどな。

「それでは、また。」

そう言って目の前にいた学生四人組は、歩いて行った。
先に進んだ四人を見て何か思うことがあったのだが、何か分からな
い。
とりあえず……

「初めにどこへ行くんだ?」
場所を確認しておかなければ。

第一話 「俺の家族」（後書き）

淳 「今回俺一言しか喋つて無い！」

悠 「仕方ないよ。家族模様を理解しなきゃ今後読者が困るから。」「…………」

とっぴり 「やつこつこと言わないでください……」

悠 「今後の予定は、大丈夫なんですよね？」

とっぴり 「…………」

……とつわけ第一話です。だらだら頑張ります。
次は、すこし遅れると思います。すみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7604y/>

俺の街のデパートで

2011年11月24日21時48分発行